

Global Commission on Evidence
to Address Societal Challenges

グローバルエビデンス委員会報告書2025年改訂版

世界中の他者から学ぶ方法の

飛躍的な改善に貢献し、
継続的な機会を見失わないために



社会的課題に対処するためのグローバルエビデンス委員会

出版情報

著作権 © 2025 年 マクマスター大学。無断複写・転載を禁じる。このレポートは [クリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際ライセンス](#) の下に提供されている。本レポートの翻案は、同一または互換性のあるライセンスで行われる限り、共有可能である。本レポートは、非商業目的であれば複製、配布、展示可能である。

本レポートおよびここに含まれる情報は、情報提供および公益目的のみのものである。事務局は、情報が執筆時点で最新かつ正確であるよう努めたが、情報は現状に基づいて提供されており、示されている見解に保証はない。本レポートに含まれる情報は、金融、法律、医療に関するアドバイスの代替となるものを意図していない。

直接的または間接的に生じた、あるいは生じたとされる損失や損害について、いかなる責任も負わないものとする。マクマスター大学、事務局および発行者は、本報告書に含まれる情報の使用または適用から生じるいかなる責任も明確に否認する。

本レポートの発行者は、マクマスター・ヘルス・フォーラム（1280 Main St. West, MML-417, Hamilton, ON, Canada L8S 4L6）である。エビデンス委員会の事務局を務めるマクマスター・ヘルス・フォーラムは、Update 2025 に関するご意見、またおよび継続的な機会（国内（および地方）のエビデンス支援システムの正式化と強化、日常生活の中心にエビデンスを置くこと）に取り組むことへの関心表明を歓迎する。ご意見は evidencecommission@mcmaster.ca までお寄せください。フォーラムは、[Evidence Synthesis Infrastructure Collaborative](#) の活動をフォローすることで、グローバルなエビデンスアーキテクチャを強化する取り組みに注目し続けることを進めます。

本レポートの適切な引用は以下の通りである：

社会課題に対処するためのグローバルエビデンス委員会、グローバルエビデンス委員会報告書 2025 年改訂版：世界中の他者から学ぶ方法の飛躍的な改善に貢献し、継続的な機会を見失わないために、ハミルトン：マクマスターヘルスフォーラム、2025

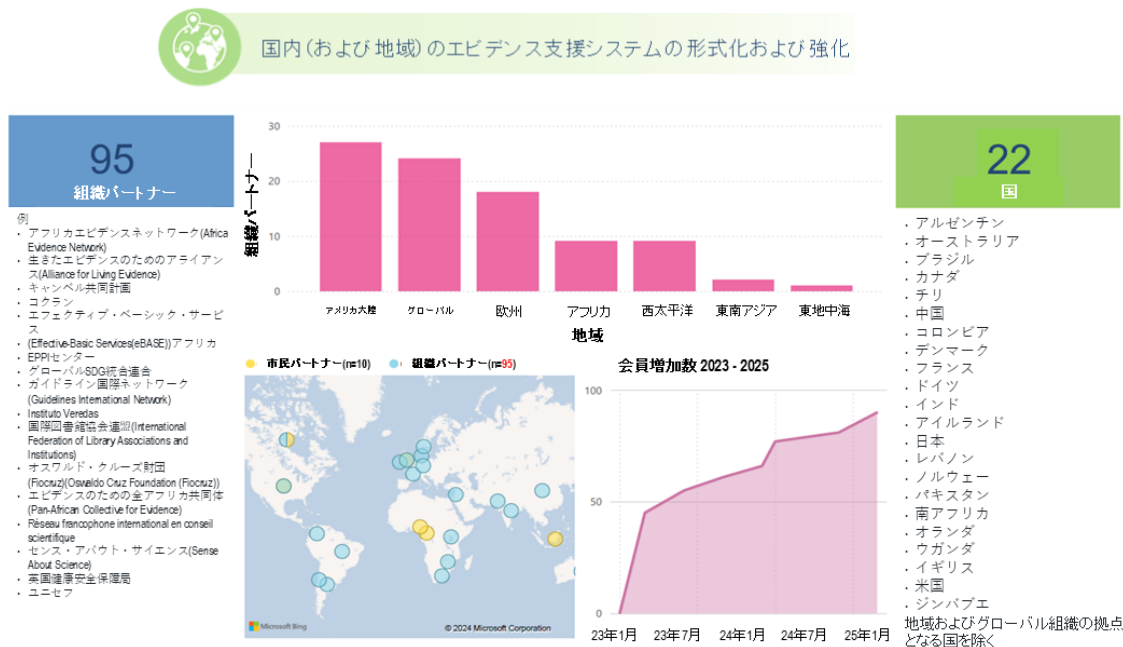
ISBN: 978-1-927565-77-3 (online)

本資料は、Global Commission on Evidence to Address Societal Challenges が作成した” Global Evidence Commission update 2025: Contributing to a step-change improvement in how we learn from others around the world, and not losing sight of ongoing opportunities” を三菱 UFJ リサーチ & コンサルティングの小林庸平及び東京大学公共政策大学院の宮木幸一が翻訳したものである。

はじめに

グローバルエビデンス委員会は、平時および将来の世界的危機的における研究エビデンスの利用を改善するための、時限的、分野横断的、草の根的な取り組みとして2021年4月に発足した。当時も、そして今日でも明らかのように、社会的課題とその対処方法に対するよくあるアプローチは、しばしばアドホックな方法で長期間にわたって学ぶことに依存している。しかし、世界は新しいアプローチへの移行を必要としている。それは、エビデンスを体系的かつ透明性をもって利用し、迅速に学習し改善するアプローチである。この重要な取り組みを支援するために、グローバルエビデンス委員会は2022年1月にその基礎となる報告書を、そして2023年、2024年、そして今回2025年の1月に改訂版を多言語で召集・発行した。これが最後の改訂版となり、グローバルエビデンス委員会は2025年3月に活動を終了する。

2024年改訂版では、社会的課題に取り組むためのエビデンス利用方法の飛躍的な改善に向けて、一般的にも、また3つの実装優先事項それぞれに関連する行動を通じて、推進力が情勢されていることを主張した。これは特に、2番目の実装優先事項（世界中の他者からより良く学ぶ方法に関するもの）において顕著だった。



私たちの実装評議会は、世界のあらゆる地域の22カ国および多くのグローバルおよび地域機関から集まった95の組織パートナーに成長して、その活動を終える。

次節では、2番目の実装優先事項で達成されたブレイクスルーについて説明し、その次の節では、1番目と3番目の実装優先事項に関連する継続的な機会について説明する。付録1では、グローバルエビデンス委員会の活動とその達成に貢献した多くのグループを紹介する。

グローバルエビデンスアーキテクチャの強化・活用

2024年の4つの出来事が、飛躍的進歩の頂点となった。具体的には、未来サミットの「アクションデー」イベントにおけるウェルカムトラストの「Evidence Synthesis Infrastructure Collaborative (ESIC)」への資金提供の意向発表と、UKRIのウェルカムトラストおよび他の資金提供者とのパートナーシップでの活動発表である。

- ベルリンで開催された「What Works Climate Solutions Summit」では、AIを活用した大規模な生きたエビデンス統合の必要性について、大胆なアイデアが浮上り始めた。
- 「SHOW ME」エビデンス・コンセンサスが投稿され、主要な「利害関係者」がより良い未来を共に描くことを助け、資金提供者に対して、問題は「人」ではなく「お金」であることを再確認させた。
- ブラハで開催されたGlobal Evidence Summitでは、キャンベル、コクラン、JBIのリーダーが、幅広いパートナーと協力し、一歩踏み込んだ改善を設計・実行することを約束した。
- ニューヨークで開催されたSummit of the Futureでは、画期的な発表がなされ、現在進行中のEvidence Synthesis Infrastructure Collaborative(ESIC)計画プロセスの引き金となった。



コンセンサス声明（上記の2番目の出来事としてグローバルエビデンス委員会のウェブサイトに掲載）は、変革の必要性を強調するのに役立った。2番目の特徴（以下の太字）がESICの発表に最も直接的に関連していますが、ESICは1番目の特徴に奉仕し、他の特徴を可能にしたり具現化したりするものとして見なされている。

SHOW ME the evidence: 研究エビデンスを必要とする人たちに確実に届けるためのアプローチの特徴

- 1) **Support systems nationally (and locally)** : 地域の優先課題の解決に資するよう多様な研究エビデンスを国家(および地域)システムで支援する
- 2) **Harmonized efforts globally** : 世界中の国々から容易に学べるように世界的に調和した取組
- 3) **Open-science approaches** : 他の人が行ったことの上に築き上げることを規範にするオープンサイエンスアプローチ
- 4) **Waste-reduction efforts** : エビデンスサポート・研究への投資を最大限に活用した無駄削減の取組
- 5) **Measured communications** 既存のエビデンスからわかっていることや注意事項を明確にする測定されたコミュニケーション
- 6) **Equity and efficiency**: この取組のあらゆる側面における公平性と効率性

7つの言語で入手可能(アラビア語、中国語、英語、フランス語、日本語、ポルトガル語、スペイン語)

5つの学術誌(Campbell Collaboration, Cochrane, Collaboration for Environmental Evidence, Guidelines International Network, JBI)で同時刊行

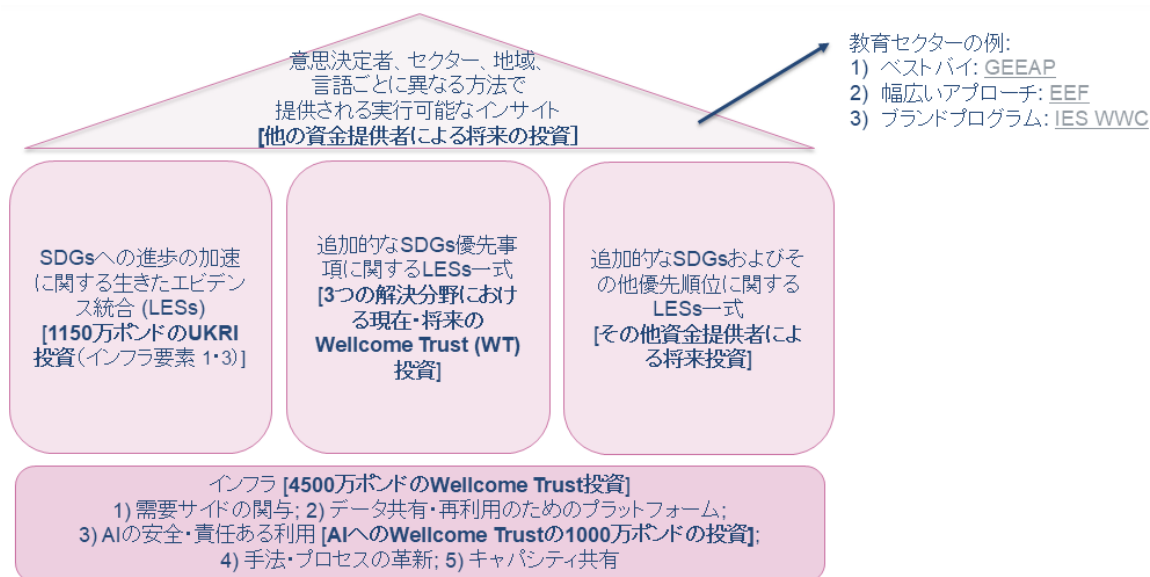


言い換えれば、ESIC（またはより一般的にグローバルなエビデンスアーキテクチャ）は、世界中から学んだことを、グループや文脈によってどのように異なるかを含めて、自由に利用できるようにする可能性を提供する。これは、洞察を直接使用できる人々（例：政府の政策立案者や専門職のリーダー）と、この世界的なエビデンスを多くの必要な形態の国内（または地方）のエビデンスと並べて置くことが仕事である人々（すなわち、エビデンス支援ユニット）の両方に向けられている。

追加の報告書（例：NESTA からの報告書）、ジャーナルの報告（例：Nature での報告）、補完的な発表（例：UKRI からの発表）および声明（例：Global SDG Synthesis Coalition からの声明）は、すべて ESIC の発表に至るまでとその後の活動の一部だった。

日	タイトル	内容
2024年9月4日	‘SHOW ME the evidence’ コンセンサス (Global Evidence Commission ウェブサイトに作業バージョンの投稿)	研究エビデンスを必要とする人たちに確実に届けるためのアプローチの特徴
2024年9月9日	エビデンスに関するより良い国際協調のためのブループリント	NESTA/英国行動インサイトチーム報告書（通称「4カ国委員会」報告書）：エビデンス統合・評価において各国がどのように協働できるか
2024年9月17日	「隠された」科学の解明が世界課題への取り組みに寄与する	Helen Pearson（ネイチャー誌編集者）によるグローバル SDGs 統合連合に関するネイチャー誌の論説
2024年9月19日	グローバルエビデンスの変革：政策立案のためのAI駆動型エビデンス統合	英国 Research and Innovation（UKRI）が、需要サイドの関与を支援し、人間とAIの能力を統合して、より適切でタイムリーかつ安価な生きたエビデンス統合を改善する「実証ケース」を提供するインフラを1,150万ポンド（1,500万米ドル）で公募。
2024年9月21日	「資金提供の意向」発表 エビデンス統合インフラ共同体	Wellcome Trust が、需要側の関与とAIの安全で責任ある利用、データの共有と再利用、手法とプロセスの革新、能力共有を支援する「 エビデンス統合インフラ共同体 」に、5年間で4,500万ポンド（6,000万米ドル）の資金を提供することを発表。
2024年9月21日	2030年およびその先へ：What Worksのエビデンスへのアクセスを通じてSDGsを加速する	SDGsへの進歩を加速するため、科学・デジタルテクノロジーの役割に関するディスカッションのビデオ録画（Wellcome Trust CEOによるJohn-Arne Røttingenによる投資発表を含む）
2024年9月21日	Scientists are building giant ‘evidence banks’ to create policies that actually work 科学者は、実際に機能する政策をつくるために大規模な「エビデンスバンク」を構築している	Helen Pearsonによる2つの助成金発表に関するネイチャー記事
2024年9月21日	SDGsエビデンスへの7400万ドルの新規投資が発表	2つの助成金発表に関するグローバルSDGs統合連合からの声明
2024年9月22日	グローバルエビデンス助成金発表に関するX投稿	英国 Economic and Social Research Council 理事長 Stian Westlake によるUKRI投資に関するX投稿
2024年10月2日	「エビデンスバンク」が公共生活におけるより良い決定を支援可能	2つの助成金発表に関するFinancial Timesからのニュース記事

ESIC の計画プロセスは、集団的影響アプローチを採用しており、必要なインフラストラクチャに関する共通のアジェンダについての合意形成から始まり、生きたエビデンス統合のスイートを優先順位付けし実施する方法、およびこれらの統合から実行可能な洞察を提供する方法についても検討している。生きたエビデンス統合とは、特定の質問に対する最良の利用可能なエビデンスの要約であり、文脈、問題、エビデンスが進化するにつれて更新されるものである。一部の資金提供者はすでに初期のコミットメントを行っており、他の資金提供者は資金提供者関心グループに参加しているため、彼らのコミットメントをどこで最もよく行えるかを積極的に検討することができる。



ESIC の計画プロセスは、特に現在、左側の2つの円と右側の2つの円に含まれる多くのカテゴリーの「利害関係者」、および市民リーダーを関与させる。「SHOW ME the evidence」の最初の特徴に沿って、計画プロセスは国内（および地方）のエビデンス支援システムのニーズを最前線に置き、テクノロジー企業も関与させている。



このプロセスは5つのワーキンググループとガバナンス企画グループによって主導されており、後のプロセスで追加の計画グループが活性化される予定である。各グループは5つのドラフト文書を作成し、それぞれが「協議ウィンドウ」中に公開される。私たちは、グループやネットワークと協力して、各グループの作業を強化する統合されたフィードバックを提供することを推奨する。

ワーキンググループ (WGs)・企画グループ (PGs)	焦点
WG1: 需要サイドの関与	生産者と潜在的ユーザーが協力して、ユーザーのニーズを理解しそれに応える
WG2: データ共有・再利用	ある問いからの学びを、異なる文脈で何度も使えることを普通にする
WG3: AIの安全で責任ある使用	エビデンス統合をテクノロジーの最前線に持ち込み、今ある人材とリソースから最高の効果を得られるようにする
WG4: 手法・プロセスの革新	抜本的にタイムリーで適切かつ安価な統合を可能にする方法とプロセスを考案する
WG5: キャパシティ共有	社会の全ての主要課題に対して、エビデンス統合を提供・活用する能力を備えたグローバル・コミュニティを構築する
PG1: ガバナンス	主要なステークホルダーが共通の目標を設定し達成するための方法を選択肢を考案する
今後、追加的PGsが発足予定	

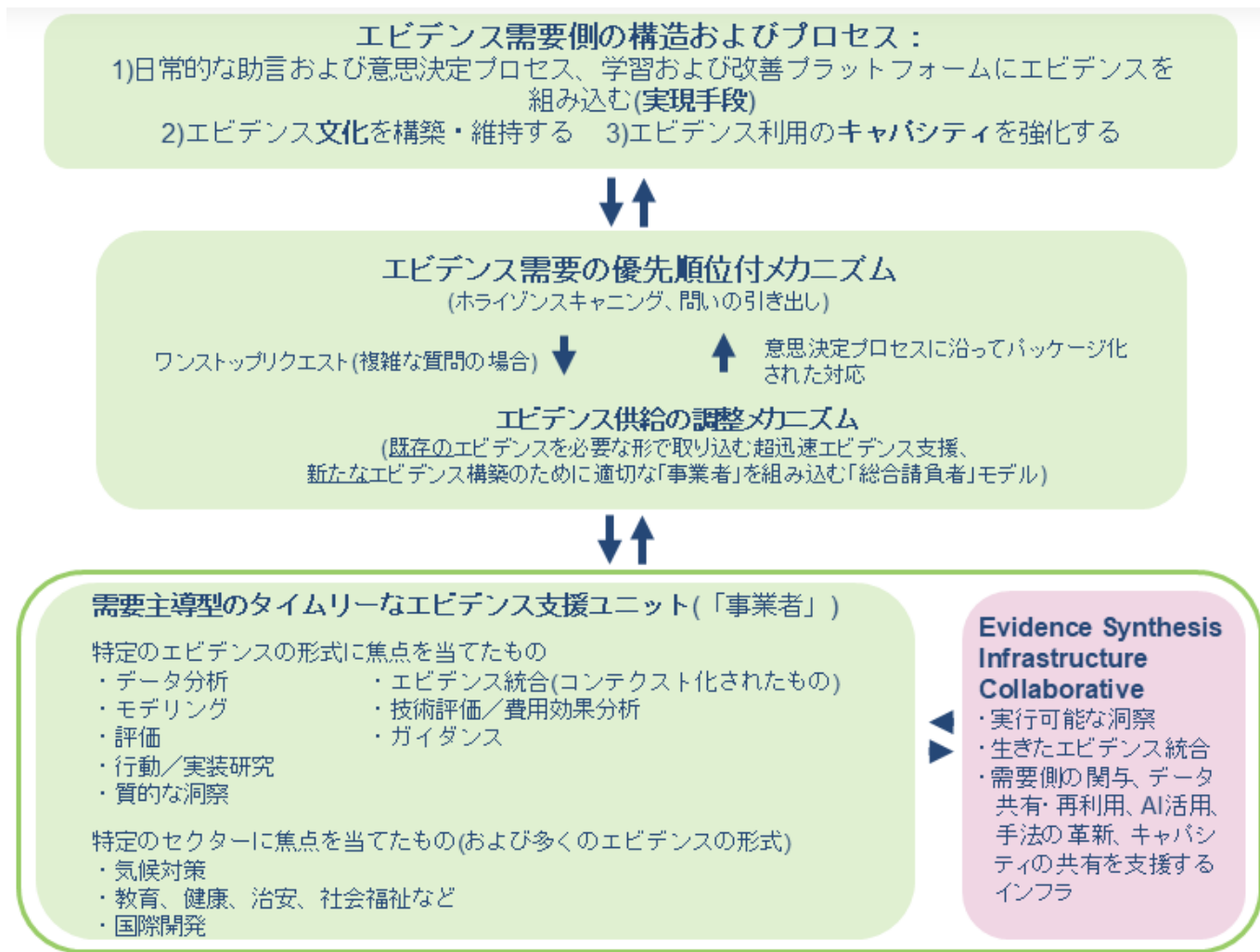
ドラフト文書	コンサルテーション期間
1) 各焦点分野へのケイバリティプロフィール	2月12日
2) ケイバリティ成熟度アセスメント・各焦点分野へのギャップマップ	3月12日
3) 各分野(後悔しないウィックウィンを含む)に関連するケイバリティを強化するための戦略	4月30日
4) 各重点分野のインパクト・努力マトリックスおよび結論・推奨	5月21日
5) コンセンサス会議出席者に事前に配布される各重点分野の報告書(現在はコスト計算と企画グループによる追加的な検討事項を含む)	6月4日

ESIC の計画プロセスに関連するすべての文書と、電子メールアラートに登録するオプションは、[ESIC の企画プロセスのウェブサイト](#)で見ることができる。

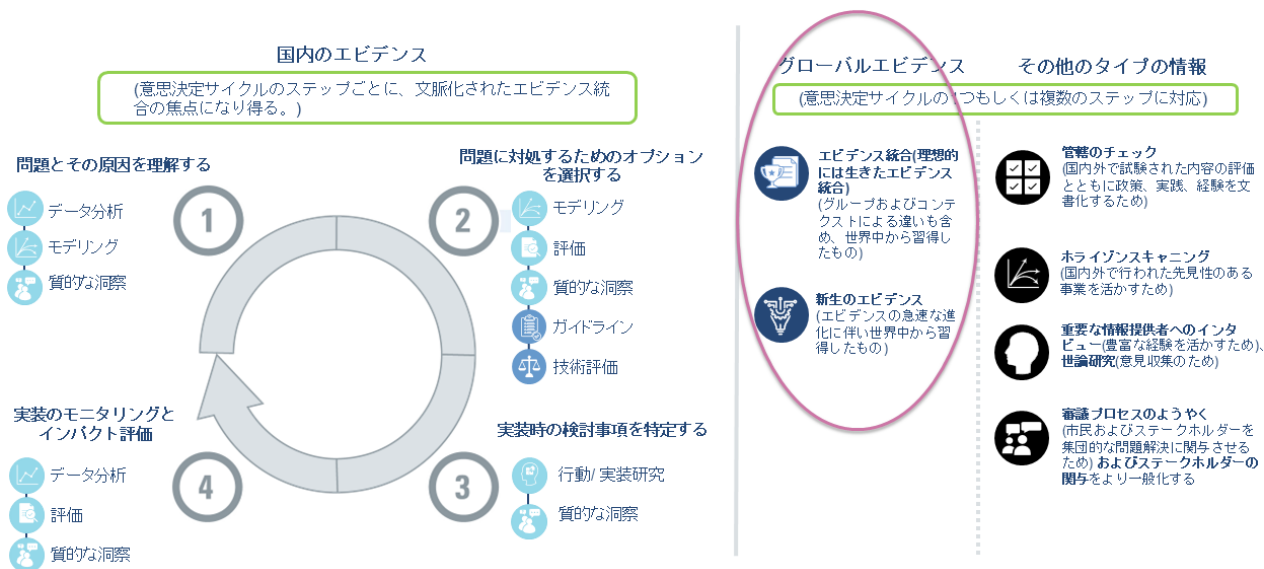
**継続的な機会：1) 国内のエビデンス支援システムの形式化・強化、
2) 日常生活の中心にエビデンスを置く**

グローバルエビデンス委員会の他の2つの実装優先事項に関する良いニュースは、人々がこれらの優先事項にアプローチする方法をESICが大きく変える可能性があり、実際に国内（および地方）レベルでの行動を促す「転換点」を生み出す可能性があることである。

国内（および地方）のエビデンス支援システム内で運営されるタイムリーな需要主導型のエビデンス支援ユニットは、ESICを通じて可能になる実行可能な洞察、生きたエビデンス統合、および支援インフラストラクチャを活用できるようになる（下の右下のピンクの「ボックス」に示されています）。



例えば、政府の政策立案者を支援する人々は、間もなく **ESIC** からのデータ（例：研究レベルの結果とバイアスリスク評価、および統合レベルの結果の確実性評価）にアクセスできるようになり、世界中から学んだことと、それがグループや文脈によってどのように異なるかについて、非常に迅速に高度に文脈化された洞察を、国内（および地方）のエビデンスから学んだことからの洞察と並べて提供できるようになる。



市民を支援する人々も **ESIC** から大きな恩恵を受ける。**ESIC** は市民のニーズに応える実行可能な洞察を提供し、日常生活の中心にエビデンスを置く取り組みを「後押し」することになる。

実装優先事項 1 に関する推進力情勢の兆候（以下の図に示されている）はまだ存在していますが、需要側での国内（および地方）のエビデンス支援システムを正式化し強化する取り組みは見られない。例えば、超高速エビデンス支援のパイロットプロジェクトや「総合請負者」モデルの拡大版への持続的なコミットメント、あるいは迅速なエビデンス支援システム評価の結果に基づく決定的な行動はほとんど見られない。

- 1a 目まぐるしい「ポリクライシス(複合危機、多くの危機的事象が同時発生する状況)」および急速に発展するAIの時代であり、すなわちこれまで以上にエビデンス支援が求められる
- 1b 超迅速なエビデンス支援および「総合請負者」モデルの試験的实施により金額に見合う価値が実証されつつあり、需要が構築されつつある
- 1c エビデンス支援メカニズムはますます助言や意思決定のプロセスに「適合」するものになっていくとともに、学習や改善のプラットフォームに合わせて「拡大」されていく
- 1d 国際的なエビデンス支援協働が、教育、開発、保健などの主要なセクターで生まれつつある
- 1e エビデンス形式を問わない協働も生まれつつある(評価とエビデンス統合の協働など)
- 1f 迅速なエビデンス支援システム評価が「より多くの種を植える」必要がある肥沃な土地を示している

同様に、実装優先事項3に関する推進力情勢の兆候の一部は存在していますが（以下の図に示されている）、日常生活の中心にエビデンスを真に置くためのコミットメントは見られない。実際、一部の国では質の高いエビデンスを提供し、誤情報/偽情報に対処する取り組みが後退している。

- 3a パートナーが学び合いのために集合する(例えば、コクラン、GCESC、WHO EVIPNetによるウェビナーシリーズ、先住民の権利および情報収集方法について議論する場の共設)
- 3b 市民はおびたしい情報、誤/偽情報を受け取っているということ、および誤/偽情報に対抗する有効な方法を見つけるための取り組み強化に関する認識を深める
- 3c 強い逆風およびこの逆風に抗って進歩を遂げるには「スクラムを組む」必要性があることについて理解を深める。
- 3d コレクティブインパクトの志向を利用する必要性に対する認識を深める

これらの実装優先事項の両方が、より良い取り組みを行う継続的な機会を構成している。

結論

グローバルエビデンス委員会は、私たちが一丸になって達成したことを祝い、社会的課題に取り組むためのエビデンスの利用を改善するために働く他の人々にバトンを渡すにあたり、皆様に参加を呼びかける。



国内のエビデンス支援システムの形式化および強化

- 超迅速エビデンスサポートのパイロットのスケールアップへの持続的なコミットメントと迅速エビデンス支援システムの評価に基づく着実な行動など、国内および地域の迅速なエビデンスサポートシステムを形式化・強化する



グローバルエビデンスアーキテクチャの強化および活用

- 企画プロセスのフォロー、協議期間中のフィードバック、各国資金提供者やその他の「ステイクホルダー」への関与の働きかけ、資金提供の呼びかけへの対応など Evidence Synthesis Infrastructure Collaboratives (ESIC) の設立を支援する



日常生活の中心にエビデンスを位置付け

- 市民を支援する NGO や市民リーダーが、各国のエビデンス支援システム、ESICの企画プロセス、その成果、そして日常生活の中心にエビデンスを据えるための継続的な取り組みに積極的に貢献できるように支援する

また、[2022年のレポート](#)と[2023年改訂版](#)、[2024年改訂版](#)、そして今回の2025年改訂版からの洞察を引き続き活用し、今後数ヶ月間にグローバルエビデンス委員会のグループが私たちの仕事について発表する論文（例：迅速なエビデンス支援システム評価の方法と結果について）に注目し、後継および補完的なイニシアチブについて質問がある場合は evidencecommission@mcmaster.ca までメールを送ることを勧める。

付録 1

グローバルエビデンス委員会は、3つの実装優先事項に取り組む3つのグループを支援した：

- [実装評議会](#), 3つの実装優先事項すべてに焦点を当てる
 - [迅速なエビデンス支援システム評価 \(RESSA\) 国別リーダーグループ](#), 優先事項 1 (国内のエビデンス支援システムの正式化と強化) に焦点を当てる
 - [市民リーダーシップグループ](#), 優先事項 3 (日常生活の中心にエビデンスを置く) に焦点を当てる
- これらのグループに関する追加の詳細は、グローバルエビデンス委員会のウェブサイトで見ることができる。

事務局は、翻訳と普及のために6つの協力センターと協力した：

- アラビア語：レバノン、ベイルート・アメリカン大学 Knowledge to Policy Center
- 中国語：中国、蘭州大学 Center for Evidence-Based Social Science
- フランス語：カナダ、マクマスターヘルスフォーラム
- 日本語：日本、総務省行政評価局
- ポルトガル語：ブラジル、ブラジリアのオズワルド・クルズ財団 (Fiocruz)
- スペイン語：コロンビア、アンティオキア大学 (UdeA) 医学部 Unit for Evidence and Deliberation for Decision Making